

童謠の要訣

Ⅰ、ウゴクとユラグ問題

大正三年の、たしか夏のある日、幼稚園協會の幾日間かの集會が催されてゐる頃のある日、東京女高師内の幼稚園一室での話です。そこで、私は作歌者として殊に深い感動を受けたのでした。それは、私共同志の三人が、強い信念の下に多年から著手しました「コドモのウタ」近頃大流行の言葉でいへば正しく童謠の創作の上に、非常に尊いショックを與へられたからでした。それは、東京市内の麻布か赤坂方面の或る幼稚園の御年輩の先生からでした。御名も物忘れしてゐて今更失禮に存じますが、それ以後、私は、コドモのウタを作ります時、又、童話を話します時、友人とも後進者とも互に相戒めて、その先生の御好意を、決して忘れないでゐるといふ事を、此の機會に申上げて、心からの感謝をいたしたいと存じます。

その事實はかうです。私共三人の「大正幼年唱歌」

葛 クズ

原 ハラ

菫 シゲル

十二冊百二十曲の第一卷に収めました曲の中、その頃出来てゐました數曲を、私が作歌者として先づ説明しまして、作曲者の小松耕輔君はピアノで伴奏し、同じ作曲者の梁田貞君は、聲樂家でもありますから、自ら獨唱して、幼稚園の實際に司はつてをられる方の御批評を乞うたのです。その時の歌曲の中に、次の一つがありました。

蝶と春風

一、ヒラヒラ舞ふよ、蝶々が舞ふよ

蝶々が舞へば、菜の花ゆらぐ

ゆらぐな 花よ。

とまれよ 蝶々。

静かにとまれ、お花に止まれ。

この歌には、二番もありますが、茲では略します。この一番で、傍線をつけました二つの言葉について、私共は、意外に、突つ込んだ御批評を頂いて、いはゞ、降参してしまつたのです。その一つは、

舞ふよ

の訓み方です。これを、私は作歌者としても平氣で、

モーヨ

とよんでゐました。所が、「モーヨ」では、幼児には分らぬとの仰せでした。さういはれて、私共も、はつと氣がつかしました。所謂、掌を打つて三歎しました。

マウヨ

でなくてはならないのでした。ウを明瞭にウと發音して、マウヨ(moyo mauyo)ちよむのでした。

これだぐ、コドモのウタの要領は之だと、三人、顔を見合せて苦笑もし、大喜びもして感謝もしてをりますと、

「も一つ、御相談ですがね」

といふ御聲に、緊張して謹聽しますと

ゆらぐ

といふ言葉に困るとの仰せ。それでは何としませうかと御きゝしますと、子供に分る子供の言葉は、

うごく

だどの仰せ。

一體、言葉に對して、かなり敏感であります私共は、ユラグとウゴクと兩者には、位置、即ち場所の觀

念が違つてゐる事を申しのべまして、風に吹かれて菜の花は、動くのでなくて、搖れてゐるのだ、搖らいでゐるのだ、だから茲では、「ゆらぐ」でなくては、と申しますと、

「しかし、少くとも幼児の世界には、ゆらぐといふ言葉は無いのですものね」

との仰せ。

それを承はつて、私共は、亂れ勝な日本語を、正しい解釋の下につかひたく、又、正しい意味に於て凡ての言葉は使ひたい、使ふ習慣をつけてやりたい、幼児の頃から……と平素考へてゐます私共は、茲では、

「ゆらぐ」といふより他に、適當な正しい言葉は無い

といふ所信を固持しようとしたのですが、倉橋氏や、大阪から御上京中の大村氏などの御説により、幼稚園時代のコドモのウタは、理解を第一とするのだからとの信條の下に、その二つの言葉のアクセントも違ひますので、曲の上にも苦心しまして、遂に、持論は撤回して、

菜の花うごく

うごくな花よ

と、今、「大正幼年唱歌」の第一卷第八頁に御覽下さる

どほりに致しました。そして、その後七八年間、日夜、コドモのウタの創作に苦心をつゞけてゐます私は、「ウゴクとユラグ」問題をたへず頭に浮べては、コドモの理解を第一條件としてをります。

2、お煎餅とお盆問題

ある夕暮、まだ電燈もつかぬ頃、私は、家の西隅にある湯殿から出たばかりの時でした。東の縁側から、けたゝましい長女（その頃、四歳）の聲が、私を驚かしました。

「お父様、大變、大變、あれ、大變々々」

私は、驚いて、狭い家の中を唯の一飛で横断しまして、東の縁側へ来てみますと、長女文子は、

「あれ、おせんべいが上つた、おせんべいが上つた」といつて、小さなお目々を大きく見張つて、眞顔になつて、訴へるのです。

「え、どこ〜、どこに、お煎餅が……」

と怪しみますと、文子は、隣屋敷の木立を見透かしてゐるのです、指さして。

私は、隣家の坊ちゃん達が、竿の先に、お煎餅でもつるして、蝙蝠でも釣つてゐるのかしら、それにしても、むぎめし麦飯粒でお池の鯉は釣るけれど、お煎餅で、蝙蝠

を釣るとは初めてだ、と考へる瞬間、文子は

「まあ、大きなお煎餅……」

と、兩手をひろげて、それこそ三歎するのです。今は二階家が建ちまして、隣り屋敷の兩側の地平線は見えませんが、その頃は、木立を通して、かなり地平線近くが見えるのでした。そこには、今し、まるい〜、大きい月が、上つて來てゐるのです。

文子は、月の出を、出たばかりの赤い色の月を見つけて、それを、お煎餅だといつたのでした。さう思つたらしいのでした。

私は、それは〜驚きました。いえ〜、大變喜びました。これが日本でなかつたら、我が子文子を抱き上げて頬すりして、キッス百篇、幼ない女兒を泣き出させるのであつたかも知れませんでした。

「あれは、月ですよ、お月様ですよ」

と、最も平凡にいつてのけたのでしたが、考へて見ると、幼児は、月といふものは、中空高くかゝつて、夜も、少くとも暗くなつてから、白く光つてゐるものと考へてゐるのでせう。今文子の見た月は、低く、隣屋敷の塀の上に、ノツソリ顔を出した面かも大きい〜色の赤い月なのですから、月とは、すぐ

に思はれなかつたのでせう。

しかし、それを、お煎餅とは、何うして考へましたのでせうか。

私は、十數年來、ヨドモのウタの中の「月」に、

出た、出た、月が。

まるい／＼まんまるい

盆の月の月が。

といふ文句のあることを知つてゐます。しかし、盆の形を圓いご意識するヨドモは、少くとも、小學校も二三年になつてからののでせう。殊に、その月の歌は、次に、弦月の事を、櫛で形容してありますが、先日臺灣から上京された或る夫人は、特志で、小學校に手傳つて、その歌の中の櫛の實物を見せるのに苦心したとお笑ひになりました。なる程、今の櫛は、方形なのさへありましてね。

そこで、私は彼の「月」のうたを、もし、幼稚園の歌にする爲には

まるい／＼まんまるい

お煎餅のやうな月が。

ご直す必要を痛感してゐます。

但し、申すまでもなく、お煎餅にも形が種々ありまして、正方形、長方形、瓢箪形、X形、Y形、多様であります。ありませうが、少くとも、月をお煎餅で形容した宅の

文字のいただくお煎餅は、手にも晴にも、必らず圓い形—もし少々不整であつても—鹽煎餅が、甚だ多かつたことを告白しなくてはなりません。シュークリームや、ブゼングの圓いことは、ブルジョアにのみ存在と思召せ。

そこで、もつと、決定的に、あの月のうたを、幼児向に直しますならば

まるい／＼まんまるい

鹽煎餅の様な月が。

ご字餘りは我慢する必要があるので、御座いませんでせうか。

以上二つの事實によりまして、私共は、童謡作者として、非常に細やかに考へてゐなくてはならない事を痛切に感じます。

此度、「幼児教育」に、童謡について何か書けとの御申越でしたので、久々で、この雜誌も、昨年の頃からのを拜借しまして、中に、外山、小松、青木、松島諸氏の御説も拜讀する機會を得ました。それに連關しまして、更に、殊に、幼児教育の實際家でゐらせらる皆様に御判断を乞ひたい幾へもの重要問題があります。機會を得ましたら、稿を改める事に致しませう。短いお話ばかり多い「幼児教育」に餘り長くては、幼児と共にお互に早く疲れますから—(一一・八・二三)